

令和4年10月23日

介護職員初任者研修の資格取得をがんばりました

佐々木 朗

1 いろいろ資格はとってきましたが、

38年間教員という仕事をしていて、子どもたちに言ってきたのは「とれる資格は取っておきなさい。」ということでした。教育現場の第一線を退いた今でも、その言葉は、その通りだと思っています。いくら上手にできていても、「免許あるの?」と言われればそれまでになってしまうのが、社会の仕組みですから。

中学校に勤めていた時、子どもたちには「英検は、取っておいた方がいい。」と子どもたちに進め、自校を会場にたくさんの生徒に受験させました。ある時、「先生、英検何級?」と言われ、ハッとしました。私は英語の教員の免許は持っていましたが、英検の資格は持っていませんでした。「よし、やるぞ。」と思って、子どもたちが受ける級よりちょっと上の準二級を受けました。昔の凌雲中学校で受けました。面接もあってドキドキでしたが、ぎりぎりセーフだったと思いましたが、何とか、言った責任を果たすことができました。今は、準二級の問題はちんぷんかんぷんです。

大型自動車免許は、楽しみ半分というところもありましたが、中体連の子どもたちの輸送にバスの免許が必要ということで、取得しました。今では大きい車の免許が細分されていますが、普通と、大型しかなかった時代でした。ほとんど大きな車など運転する機会はありませんでした

が、まあ、がんばって良かったかなあと思っています。

パソコン検定や、情報処理コーディネーターは、一応私の専門分野でして、情報教育にずっと携わってきたこともあり、何か「ハク」を付けたいというのもありました。大学院に通っていたあたりは、勉強する時間もありましたので、勉強してすぐ取れました。

防火管理者は、学校管理職になり、施設の防火管理に必要な資格なので、講習会で取得しました。消防本部の上のフロアで、百人以上の方と一緒に撮りました。

陸上特殊無線技士は、アマチュアガイダンスを運用することもあるかなあと考えて取りました。三級、二級と取ったのですが、今から考えると、大したレベル差もないので、一発二級で良かったかもしれません。でもその後ガイダンス局を運用する立場にもなったので、取っておいて良かったことは間違いありません。

現職最後で思い出に残るのが、日商ビジネスキーボード。いわゆるどれだけ速くキーボードを打つかという試験です。子どもたちにタッチタイピングを教えていたので、「最後に先生もがんばってみる。」と子どもたちの前で約束して、函館で受験しました。英語や数字などの入力は、そこそこの速さでしたが、日本語入力は、時間をわずかに余して、全て入力

することができました。「私ちょっと、打つのは速いのよ。」と言えます。でも間違えないようにしないとイケないですね。

教員として必要だったのが、教員免許。幼稚園二種、小学校専修、中学校専修(英語)、高等学校専修(英語)でした。大学卒の時は、一種免許でしたが、大学院へ行きましたので、専修免許となりました。英語も専修免許ですが、大学院では、英語の授業は一つもなく、全くのペーパーです。あまり英語の免許を持っているなどと人前で言うと、通訳とか観光案内とかの依頼が来たら、赤っ恥をかくのが目に見えていますので、できるだけそっとしておいています。英語は現在ほぼ全滅状態です。ちなみに給料は1円も変わりませんでした。

今、一番活用しているのが何と言ってもアマチュア無線の免許。第一級アマチュア無線技士をもっていますので、操作範囲は「アマチュア無線局の無線設備の操作」となっており、「〇〇以下」みたいな制限がありません。今1KWまで出せるのはこの資格のおかげです。平成9年の取得です。

これからも頭の働かうちは、一年に一つくらいは挑戦していきたいなあと思っています。

2 そして介護の免許

今、便利屋さん勤めていて、「資格は何もなくてもいい、」っていえばいいのですが、やっぱり有資格者ということがあれば、信用もあがると思うのです。私がどうして介護の免許を取ろうと思ったかお話ししましょう。

お店には高齢者関係のお仕事もちよこちよこ来ます。病院へお連れすることもあります。私が介護の免許を取ろうと思った一番のきっかけは、仕事で大失敗してしまったからです。その日は、足が不自由な方の車から車いすへの移乗でした。お客様は、「ベルトに手をかけて、ぐっと引っ張ってくれればいい。」ということでしたので、私は、ふんばって、乗せようとしていました。ところが、ベルトが切れてしまいました。力づくでしたが、何とか、けがもなく、車にお乗せすることができ、ベルトを弁償させていただくということで、その仕事を終えることができました。家に帰り、介護の資格を持っている妻に話すと、「お父さん、ちゃんとやり方っていうものがあるのよ。介護の勉強してみたら？」ということで、勉強することになりました。今から思うと、足の位置は、手のかけ方など、今だったら、その時とは、違うなというちょっとは自信はあります。

早速ホームページで情報収集開始です。まず、わかったのは「ホームヘルパー2級」という資格が「介護職員初任者研修」と変わったことです。

パンフレットを請求するとすぐに何社から届きました。函館で受講できないものを除くと、遠隔でできるものと集まってやるものがありました。一人でパソコンの前で学ぶのは楽でしょうが、やはり集まって勉強したいと思い、ニチイを選びました。毎週一回水曜日がその日です。会社の理解もあり、その6月から10月まで水曜日を空けてもらう配慮をもらいました。

お金を振り込むと(7万円ちょっとぐらいだったと思います)、早速、分厚い教科

書が5冊、そして資料も送られてきました。覚えることが苦手な60代がどこまでがんばれるか不安もありましたが、ぱらぱら程度でしたが、中身を見ました。

こうして、6月29日から、10月19日までの4カ月にわたる勉強が始まったのでした。

3 学んで楽しい

「何人位集まるんだろう。」「若い人ばかりだろうか。」「頭に入るだろうか。」などいろいろな不安を抱えながら、本町のニチイに向かいました。教室は北海道銀行の5階です。車は会社に置いて、行きは電車、帰りはバスというスタイルで通いました。

一緒に学ぶ仲間は7名。少ない人数でしたし、いろいろな年代の方もいて、私としては、とても安心できました。

毎週水曜日午前9時半から、午後4時半まで16回の勉強が始まりました。途中レポート提出が4回あります。事前に渡されていますので、教科書を見ながら、選択問題を解き、200字以上の記述式も埋めていきました。

週一回の顔合わせでしたが、メンバーとも仲良くなり、情報交流などもでき、レポート問題も何とかこなすことができました。

講師は、何回か担当して下さる先生と、一回きりの先生もいました。それぞれ、現場の第一線を経験された方、現に第一線にいる方と、介護についての様々な経験談も話して下さり、毎日がとても楽しみでした。

また、教室担当の先生も、毎週、顔を

出して下さり、丁寧な対応をして下さり、私達は安心して勉強することができました。

60歳を過ぎると、「覚える」ということが苦手になります。何年に何という法律ができたみたいなのは、全くダメですが、基本的な理念や考え方などは、それなりの人生経験もあり、なるほどなあと思うこともたくさんありました。

教科書が5冊あるので、かなりのペースで進むのですが、大事なところに線を引いたり、大切なところをノートに写したり、また時には、ウトウトしたりの毎回の授業でした。

後半は実技が多くなりました。ベッドに寝ている方を起こす、服を着替えさせる、押し目を取り換える、体を拭く、髪の毛を洗う、車いすに乗せる、トイレについていく、杖を持った方の介助、いろいろ経験しました。受講生同士が介護者になったり、利用者になったりしました。両方の立場を経験できたというのも良かったです。

最後の2週は実技に関わる試験と、全体を通しての試験があります。なかなか入らない私の頭ですが、がんばりました。ペーパーの方は、ある程度余裕がありましたが、実技の方では、忘れてしまったことも多く、けっこうぎりぎりでしたが、合格することができました。ドキドキの2週間でした。

この5か月でいろいろな「初めて」に出会いました。新しいことを学んでとても新鮮でした。また、改めて「初めて」に出会うこと、学ぶということの楽しさを感じました。

4 私が学んだこと

ややこしい法律論は抜きにして、私が学んだことをまとめてみたいと思います。

まず、今後しばらくは、高齢者が増え続けるということです。段階の世代が75歳を迎える2025年あたりがピークになりそうです。その後は、高齢者も減りますが、昨今の少子化により、日本全体の人口が、減っていくようです。ちょっと行く先が心配になってきます。人がいて、産業があって、暮らしがありますので、将来の日本の展望をしっかりとった次世代の若者を育てなければならないなあと感じました。

介護においては、介護することはお手伝いをするのではないということを認識しました。介護をするということは、できないところを手助けすること、裏を返すと、できるところは自分でやってもらうということです。何でもかんでもやってあげるといわれる過看護となり、それは、利用者の自立を妨げることになるということです。学校で勉強を教えるのも全く同じ理屈です。

また、声掛けを丁寧に行うことです。「本日担当させていただきます佐々木です。どうぞよろしくお願いいたします。」「これから、何々をお手伝いさせていただきますが、よろしいでしょうか。」「カーテンを閉めさせていただきます。」「立った場合などは、「ご気分は変わりないでしょうか。」「こちらの方は、お手伝いさせていただきますね、そちらの方はご自身でやっていただけますでしょうか。」など、とても細やかな声掛けが大切であるということも学びました。

また、利用者にはそれぞれそれまでの長い人生があるわけで、介護においても、その方の生き方を最優先した介護が求められるということです。こちらで、ベストと思ったことでも利用者にとって、受け入れがたい方法でのアプローチは難しいということです。介護者としては、利用者の心に寄り添う介護、安心して任せられる介護、信頼される介護者になることが大切であることを学びました。これは、介護の世界だけではなく、全ての人間関係で共通することでしょうね。

利用者への家族への対応も、大切な介護者としての責務です。特に寝たきりや、徘徊を伴うなどがあると、家族は、24時間気を休めることができません。また、先天性の難病を持つ親もまた然りです。悩みを共有する家族会への参加、また、デイサービス、ショートステイなど、家族を一時的に気持ちを安らげる時間を作る、いわゆるレスパイトケアの大切さを学びました。

今まで、全く考えたことのなかったのが終末期の介護。自分に「死」が近いことがわかってからの心の動きを勉強しました。そのことが受け入れられない段階から、いくつかの段階を経て、その事実を受け入れることができるようになるということです。家族としては、その時が近づいてきた時に、本人を含めて、今後の事を話し合っておくなどということも大切であることがわかりました。全くそのことに触れないというのも、一つの考え方なのかもしれませんが、本人にとっても自分の気持ちを近親者に伝えておくということも大切なことであることを学びました。

頭では、わかっていますが今の私にとっては「死」について考えるのは、やはり他人事になっています。しかし、そういう現場に立ち会うことがあるとしたら、また、いつかそういう場を必ず迎えるわけですから、学んだ知識を活かし、最善の対応をしていきたいと思ひます。

まだまだ、いろいろなことを学びましたが、結局のところ、人が人を優しさをもって介護するという「人間愛」に尽きるような気がします。学びながら、教育という私の専門分野から見ても、共通項がとても多く感じました。

5 最後に

自分の失敗がきっかけとなり、介護の資格を取得することになり、その課程を修了することができ、自分の引き出しの数がまた、かなり増えたように感じます。今の便利屋という仕事の中でも、また、

いつか自分の家族に関わるようなことでも、学んだことを活かせる機会はあるのではないかと思ひます。

振り返るとアッという間のようなのですが、たくさんを学ぶことができました。たくさんを教え下さった多くの講師の先生方、そして、私達の担任として、細やかな配慮をしてくれた担当の職員の方には、感謝の気持ちでいっぱいです。また、なかなか物を覚えられない、実習がぎこちない中、助けてもらった、受講生の仲間の皆さんにも、感謝です。そして、忙しい中、勉強に出ることをお許しいただいた職場の長をはじめ、会社のスタッフの皆さんにはとても感謝です。ありがとうございました。

私はもう少し社会の第一線でがんばり、社会で役に立つ存在に慣れるよう努力を続けたいと思ひます。

(令和4年10月24日記)